

下北方地下式横穴第5号

緊急発掘調査報告書

宮崎市文化財調査報告書

第 3 集

1977

宮崎市教育委員会

例 言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が、昭和50年7月4日から7月14日まで実施した、下北方地下式第5号の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査には、石川恒太郎、田中茂、茂山護があたり、資料整理には、田中茂、茂山護、野間重孝、岩永哲夫、面高哲郎があたった。
3. 本文の執筆者の氏名は、目次に明記した。
4. 原稿執筆の段階で十分討論をもつ時間がなく、用語の統一を欠いた点がある。
5. 挿図の実測については、茂山護、野間重孝、岩永哲夫、面高哲郎、田ノ上哲が行い、トレスについては、茂山護、野間重孝が行った。
6. 写真撮影は、野間重孝が行った。
7. 本書の編集は、野間重孝があたった。
8. 本書における出土遺物は、宮崎県総合博物館に保管を依頼している。
9. 本書刊行前は、本地下式横穴を「下北方地下式第4号」として、とりあつかっているが、その後の資料整理によって、「下北方地下式第5号」と訂正する。

昭和 52 年 3 月 31 日

宮 崎 市 教 育 委 員 会

本文目次

序章 調査の経過と調査団の組織	野間重孝	1
第1章 地形および歴史的環境	石川恒太郎	4
第2章 構造と層位的にみた構築		7
1、構造	野間重孝	7
2、層位的にみた構築	野間重孝	7
第3章 遺物		10
1、装身具	茂山 護	10
2、鏡	茂山 護	16
3、武器	茂山 護	18
4、武具	茂山 護	23
5、馬具	田中 茂	27
6、農工具	野間重孝	31
7、その他の遺物	茂山 護	34
第4章 封土墳7号と地下式横穴4号、同5号との重なり合いについて	田中 茂	35
第5章 結 語	田中 茂	37

挿 図 目 次

第1図	下北方古墳群分布図及び周辺遺跡位置図	2
第2図	下北方古墳群第7号墳、地下式横穴第4号、5号地形図	3
第3図	地下式横穴第5号実測図	8
第4図	装身具実測図Ⅰ〔勾玉、管玉、変形半円玉〕	11
第5図	装身具実測図Ⅱ〔金製垂飾付耳飾、変形半円玉、大形丸玉、丸玉〕	12
第6図	鏡実測図及び拓影〔変形楕形鏡、変形紋鏡〕	17
第7図	武器実測図Ⅰ〔剣、直刀〕	19
第8図	武器実測図Ⅱ〔鉾、鉄鎌〕	21
第9図	武具実測図Ⅰ〔頸甲、小札〕	22
第10図	武具実測図Ⅱ〔横切板鍔留短甲〕	25
第11図	武具実測図Ⅲ〔三角板鍔留短甲〕	25
第12図	武具実測図Ⅳ〔盾庇付背〕	26
第13図	馬具実測図Ⅰ〔鞍金具、轡、杏葉、轡鏡板〕	28
第14図	馬具実測図Ⅱ〔三環鈴、馬鐸〕	30
第15図	農工具実測図〔手斧、鉄斧(大型、小型)、のみ状鉄器、カギ状鉄器、鎌〕	32
第16図	須惠器片実測図及び拓影	34

表 目 次

第1表	変形半円玉計測値	13
第2表	大形丸玉計測値一覧	13
第3表	丸玉計測値一覧Ⅰ	14
第4表	丸玉計測値一覧Ⅱ	15
第5表	出土ガラス玉の化学成分	16

図 版 目 次

- 図版1 出土遺物〔須恵器片〕
図版2 下北方古墳群遠景〔下北方古墳群第2号墳頂から〕
図版3 下北方古墳群第7号近影
図版4 地下式横穴第5号陥没位置
図版5 地下式横穴第5号陥没穴
図版6 整墳及び羨道部
図版7 羨道閉塞状態
図版8 玄室内部構造
図版9 内部構造〔衛立状石積み状態〕
図版10 屍床内副葬品出土状態
図版11 鏡出土状態
図版12 短甲出土状態
図版13 勾玉、丸玉出土状態
図版14 金製垂飾付耳飾出土状態
図版15 眉庇付青出土状態
図版16 出土遺物 装身具〔勾玉、管玉、金製垂飾付耳飾、丸玉(大・小)、
変形半円玉〕
図版17 出土遺物 武具Ⅰ〔横柄板鍔留短甲、三角板鍔留短甲〕
図版18 出土遺物 武具Ⅱ〔頭甲、小札〕
図版19 出土遺物 武具Ⅲ〔眉庇付青〕
図版20 出土遺物 馬具Ⅰ〔鞍金具、轡鏡板、鏡、杏葉〕
図版21 出土遺物 鏡〔変形紋鏡、変形畝形鏡〕
馬具Ⅱ〔三環鈴、馬鐸〕
図版22 出土遺物 武器〔剣、直刀、鉞、石突、鉄鎌〕
農工具〔手斧、鉄斧(大・小)、のみ状鉄器、カギ状鉄器、鎌〕

序 章 調査の経過と調査団の組織

昭和50年7月2日に、宮崎市下北方町塚原5783番地(所有者、宮崎市下北方町5660番地、大野仁一郎)において、宮崎市大坪町の丸善造園(真子 賢)が、当地を借用して、植木苗圃造成を行うため、大型機械を入れて、開墾をしていたところ、下北方古墳群(昭和14年1月27日、県指定)の円墳7号墳の南西方向にあたる墳丘裾部が陥没し、その発見となった。筆者は、県文化課の岩永主事を伴って、現地調査を行った。

陥没したのは、地下式横穴の天井部にあたり、径が約150cmの陥没穴を見、かなり大きい玄室をもっていることがうかがわれた。陥没の状況や周囲の状況から、緊急調査の必要を感じ、とりえず、陥没穴周辺にさくをするとともに陥没穴を雑木等で塞ぎ、緊急調査の手続きをとることにした。

発掘調査については、県文化課との協議により、宮崎市教育委員会が主体となって実施することになった。

調査は、7月4日から開始し、当初は、5日間の予定で行うことにしていたが、予想した地下式横穴の性格と反し、構造、規模、副葬品において希れにみるものであったため、調査日程を延長し、11日間の調査となった。

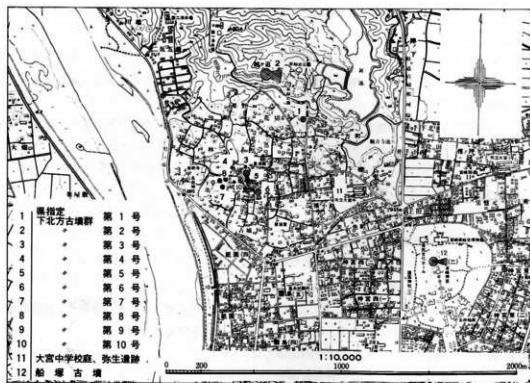
なにしろ、初めての宮崎市教育委員会単独の緊急調査であったため、予算、人的面に不十分であり完全な発掘調査ができなかったむきがある。

調査団の組織

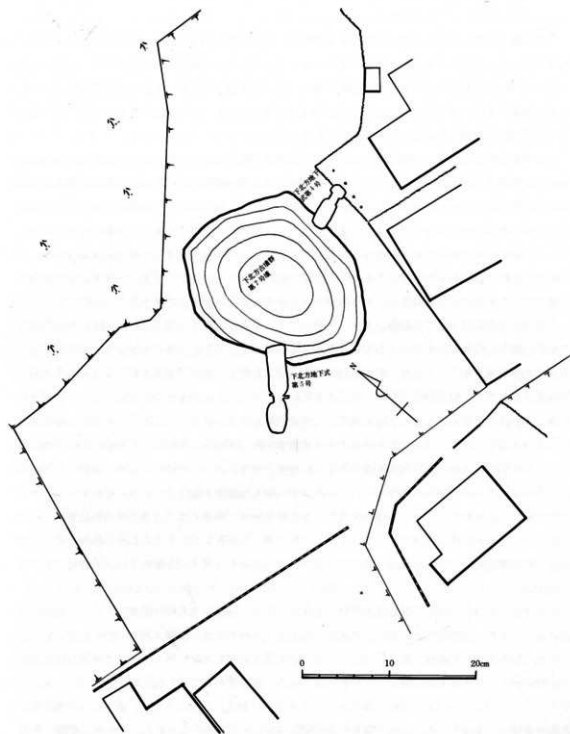
調査主体	宮崎市教育委員会
調査員	石川恒太郎(宮崎県・市文化財審議委員) 田中 茂(宮崎県総合博物館学芸課主任) 茂山 護(宮崎県総合博物館学芸員)
調査補助員	田ノ上哲、白石章二、足立宏美、緒方昭彦、井手強、浦民雄、東光一、武藤和卓、渡辺隆、西山千恵子、亀元清美(以上宮崎大学史学研究所)
調査協力	日高 正晴(宮崎県文化財審議委員) 岩永 哲夫(宮崎県教育委員会文化課主事)
事務局	宮崎市教育委員会 教育長 渡辺 綱夫 社会教育課 課長 大島 清一 補佐 結城 康嘉 主事 野間 重孝(調査担当)

調査は、調査員や調査補助員の熱意ある作業によって、順調に進めることができた。なかでも、調査後半になって、数々の貴重な副葬品が露出し、夜間の盗難が危ぶまれた際、現場にキャンパント

を仮設し、交替で監視を続けてくれるなど、昼夜にわたって調査に協力いただいた宮崎大学史学研究所の学生諸氏、また、発掘調査を快よく承諾いただいた土地所有者大野仁一郎氏、土地開墾を中斷し、調査に協力いただいた丸善造園の真子賢氏、それに、現場近くに居住されて、調査資材の保管や種々の御援助、御協力いただいた土持庫平氏や調査に関係された多くの方々に深甚の謝意を表したい。



第 1 図 下北方古墳群分布図及び周辺道路



第 2 図 下北方古墳群第 7 号墳、地下式横穴第 4 号・5 号地形図

第1章 地形および歴史的環境

下北方地下式第5号墳が所在する宮崎市下北方町は、宮崎市街地の北方の大淀川の下流東岸にある。宮崎県第一の大河である大淀川は都城市を中心とする、いわゆる諸県盆地の支流を集め、東流して宮崎市入り、市内倉間で支流本庄川を合せて東から南に谷を描いて流れ、さらに福島町付近で東に折れて日向流にそそいでいるが、この大淀川が本庄川との合流点から、東に弧状を描いて流れているところのほぼ中央部の東岸の丘の上に下北方町があるのである。

この下北方町が位置する宮崎市の北部、大淀川北岸地方は、北方から南に向かって降下している高さ80m内外の丘地におおわれているが、この丘地の中で最も高い標高120.5mの宮崎城址のある丘地は、南方の宮崎平野に向って、東西二丘に鞍状に降下し、二丘とも大淀川によって遮断されている、西方の丘は柏田町で終り、東方の丘はさらに東南に伸びて平和の塔の建っている下北方町に達している。それで、この下北方町は宮崎平野の北方に突出している丘地の先端に位置し、後ろに丘地を負い、前は大淀川を隔てて宮崎平野に南面するという絶好の地に位置しているのである。だから、この丘地の先端部の下北方は、古来宮崎地方における歴史上に最も重要な位置を占めてきた。

下北方丘地の基幹をなす宮崎城址のある丘地の上に位置する垂水公園のところでは、先土器時代の石器や縄文時代前期の柏田式土器などを出土しているが、この丘の西側の先端である柏田町には、有名な柏田貝塚があり、これは、故浜田耕作博士（京大教授）によって調査され、ここ出土土器は柏田式と命名され、縄文時代前期にランクされている。さらに、この丘が大淀川によって遮断された西岸の跡江の丘地にある跡江貝塚も縄文時代早期のものとして知られている。また下北方町一帯は弥生時代の包含層で、弥生時代の中期を中心とする遺物が、かつて市立大宮中学校的校舎建設の時や昭和26年の県教育委員会による下北方古墳調査の際などに発見された。さらに古墳は下北方古墳群として前方後円墳4基、円墳12基が県の指定となっているほか、南九州独特の地下式古墳も昭和4年に2基、同20年に1基、同44年に1基と本墳を加えて7基が発見されている。また、この後方の丘地には平和ヶ丘にあった31基の横穴をはじめ、おびただしい数の横穴が群生している。これらの古墳のほか、指定された宮崎神宮境内にある船塚陵と呼ばれる前方後円墳は最も注目すべきもので「日向地誌」には、「船塚陵」

宮崎神宮ノ後山陵ナリ其巖巒樹鬱鬱一林丘ヲナス故ニ古ヨリ土人呼テ船塚山ト云テ是ヲ船塚ト云何ノ故ナルカ或ハ其形船ニ似タルヲ以テ名ケシニヤ上人ハ神武天皇ノ御船ヲ埋シ山ノ故ニ斯ク呼ベリ或ハ天皇東征ノ日御船ヲ繋ギシ所ナリト云ハ皆不確ノ妄説ナリ此レ疑フベクモク天皇以前上ノ山陵ト見ユレドモ何天皇ノ陵ナリヤ今考ヘ正所ナシ其形東西長フシテ四十間（約72.7m）南北短シテ二十一間（約38.2m）東西両畔ハ隆然トシテ円ク中央ハ稍低シテ副亦少シク變ル恰モ伏狐ノ如シ其高サ東畔ハ二丈七尺（約8.1m）西畔ハ二丈四尺（約7.3m）中央ハ一丈八尺（約5.4m）周囲二町零五間（約227.3m）宮崎神宮ハ其南ニ鎮座ス蓋シ中古廟ヲ設ケル時陵址ノ地ヲ除テ基礎ヲ創建セシモノト思ハル今嗣宮ノ前二邊塚アリ縦二十九間（約52.7m）横六間（約10.9m）此レ上古山陵ヲ築キシ時陵址ヲ覆テ壘シ陵塚ナリト見ユ

と書いている。現在宮崎神宮の付近に船塚町の地名があるのは、この古墳の名に因るのである。この古墳も、もちろん下北方古墳群に属するのである。さらに平和台の麓の市立大宮中学校の西側に、皇宮屋と呼ばれる神社があるが、ここは、もと宮崎神宮のあった址と伝えられている。宮崎神宮は北島親房の著「神皇正統記」（1339）や「藤原抄」（1340）などに神武天皇が日向国宮崎宮に居られたとある宮崎宮の跡に天皇の霊を祭ったもので、もと神武天皇と称したが、明治5年（1872）に宮崎神宮と改称し、翌6年に国幣中社となつた後11年、勅命をもって宮崎宮を改めて同18年に宮幣大社となつた。現在の位置に移ったのは明らかでないが、前掲「日向地誌」に中古に同塚の一部分を除いて祠廟を設けたとある時であろうと思われるが、その以前は皇宮屋に鎮座されたと伝えられ、皇宮屋の地は即ち神武天皇の宮崎宮の跡であると伝えられている。

また、この地下式第5号に近いところに善法山帝釈寺という曹洞宗の寺院があるが、この寺院も宮崎の古刹の一で、神武天皇の皇居の跡に建てたので、はじめ天台宗で帝釈寺と書いたが、一時、廃寺となり、応永二年（1395）に天台宗を曹洞宗に改めて再興したとき帝釈寺と改めたと伝えている。

神武天皇の皇居については「古事記」には高千穂宮に居られたとあり、神武天皇自体が神話上の神であるから、現実にその皇居などあるべきはずはないが、この下北方町にそれが在ったという伝承が、このように根強く残っていることは、前に記したように、その位置が広大な宮崎平野に、北から南に突出している丘地であって、後ろに山岳を負い前には大河を隔てて、いわゆる天子南面の場所であり、この地方を統轄するに恰好の場所であるとともに、古代の遺跡が多く残っていて古代から地方統治の中心であったからであろうと思われる。このことは有史以後においても見られることで、奈良時代以来、この地方は日向国五郡の一である宮崎郡に属したが、奈良時代以来、近世初頭まで宮崎郡は、現在の宮崎市の大部分から日南市、串間市、南郷市を併せた地域であった。この宮崎郡を治める役所であった郡家の跡は今日明らかではないが、平安時代には、この地方は宇佐八幡宮（豊前国）の領地たる宮崎の荘となった。この荘園の設定その他のことを記している「宇佐八幡宮」によると、宮崎の荘は日向国諸藩為隆の任期中の永承年間（1046-1052）に宮崎郡内の郡家を中心とする地方の荒地を開墾して宇佐八幡に献上されたことが書かれている。そしてこの荘園は鎌倉時代の建久8年（1197）の「日向国宮田帳」には、宮崎庄300町とあるが、その後、天正19年（1591）の「日向国五郡分帳」によると、宮崎庄の名はなく、宮崎南方100町、同北方100町、池内方100町の名が見える。すなわち宮崎庄300町は、宮崎北方、同南方、池内方の各100町ずつに分れたわけである。そして、さらに宮崎庄は、上北方と下北方に分れたのであるが、宮崎の名は北方と南方に最後まで残ったことは、奈良時代以来の郡家が、宮崎北方、宮崎南方の両地どちらかにあったことを推測させるもので、その何れであったかは明らかではないが、その位置から見れば北方、さらに下北方にあったことが推測されるのである。

さらに近世においては、天正15年（1587）に豊臣秀吉が島津義久を降して九州を統一して、九州の諸大名の国割りを行ったとき、宮崎地方は延岡藩の高橋元種（元就）の領地であったが、宮崎は、延岡藩の飛地であった関係から高橋氏は宮崎城に城代家老として後藤平左衛門輝盛を置いて治めさせた。この宮崎城は、南北朝の戦争の際、延元元年（1336）に因幡六郎入道意円が、この城に拠って南朝に応じた

のがはじまりである。しかし、延岡藩主の高橋元種に代って藩主となった有馬直純のとき、元和元年(1615)に幕府が一國一城令を出したので延岡城以外の宮崎城などは廃城となった。それで延岡藩では、宮崎の領地は下北方に代官所を置いて、これを治めることとした。この代官所の位置は皇宮屋の東側で、現在市立大宮中学校のあるところで、ここに代官が1名または2名、その下に代官所詰の役人が10名内外在役に治めたのであった。

このようにして、これから明治4年(1871)に藩が廃されるまで、この場所は、宮崎地方における藩治の中心地であったのである。

さらに、明治6年に初めて宮崎県が置かれたときも、宮崎県庁は、ここに置かれる予定であったが、当時ここが交通不便であるという理由で、県庁役員らが現在の土地(上別府村)に変更方を願ったので現位置に設置されたのである。このように、この古墳の所在する地形と歴史的環境を覗けば、この古墳が極めて重要なところに設けられていることが知られるであろう。

註1、「日向遺跡調査報告書」第1輯、宮崎県教育委員会 1952

註2、「宮崎宮略縁起」永友亦年著(内藤家文書)

註3、「宇佐大鏡」日向郷土史料集、第七巻所載。

註4、「日向国因田帳」日向郷土史料集 第五巻所載。

註5、宮崎県古文書、明治6年「大蔵省諸領伺届」県立図書館所蔵。

第2章 構造と層位的にみた構築

1. 構造(第3図)

地下式横穴第5号は、県指定下北方古墳群の円墳第7号墳の封土下に玄室をもつものであり、堅壁部を南に、羨道、玄室を北にし、正確には主軸をN39°Eの方位を示している。

堅壁の輪郭については、羨道よりの上部においては345cm、同下部で240cm、端部について完損してないため不詳であるが、下部では、おおよそ170cmで堅壁下部長径330cmを計り、上部に開き、下部にすばまりの逆台形状のかなり大きい堅壁であることがうかがえる。

羨道部は、間口125cm、奥行き135cm、高さ135cmを計る。羨道には、羨門口から約60cmほど入った両側に挟り込みの袖がつけられている。東側挟り込みについては、幅32cm、深き65cm、西側挟り込みは幅116cm、深き42cmを計り、天井部にかかる部分については剥落しており、その挟り込みを確認することはできないが、剥落の状況からして、さほど深い挟り込みはなかったものと思える。また閉塞の状況を見ると、羨道部床面に15~30cmの厚さに粘土を施し、その上に径25cm前後の円礫を60cmほどの高さ積みあげていたが、両側の挟り込みには敷石をみなかった。以上のことから羨門閉塞は両側に顕著な挟り込みをもつことなからして、当初に板状のもので閉塞を行い、その後円礫を積みあげ固定したものと考えられる。

玄室については、主軸長径535cm、東方側で555cm、西方側で495cm、幅については、第3図のC-Dで266cm、E-Fで235cm、天井までの高さは最頂部で170cmを計る。

玄室内部は、調査前には、50~60cmの堆土があり、施設や副葬品についてはみることができなかったが、調査が進むにしたがってその全貌が明らかになった。構造は妻入型であり、施設については、前部と奥部に径30cm内外のかなり太目の円礫が30個余り、それぞれ積みあげられており、それらの間に長さ350cm、幅80cmの長方形に縦長の円礫が配石された屍床が構築されている。また床全面に小円礫が敷石されており、側壁及び天井部には、酸化第Ⅱ鉄によるベンガラが全面に施されている。

2. 層位的にみた構築(第3図)

地下式横穴の構築状況の層位的観察は、堅壁の羨門口断面において行った。しかし、構築当時のプランについては、周囲が植木苗圃造成のため完全に攪乱状況になっているので、上層の観察は不可能であった。したがって、かなり厚い天地返しを受けている層を第Ⅰ層としてとりあつかうことにした。以下は確実にその層位を確認することができた。

第Ⅱ層 黒褐色土層(小白班ルーム)、厚き35cm

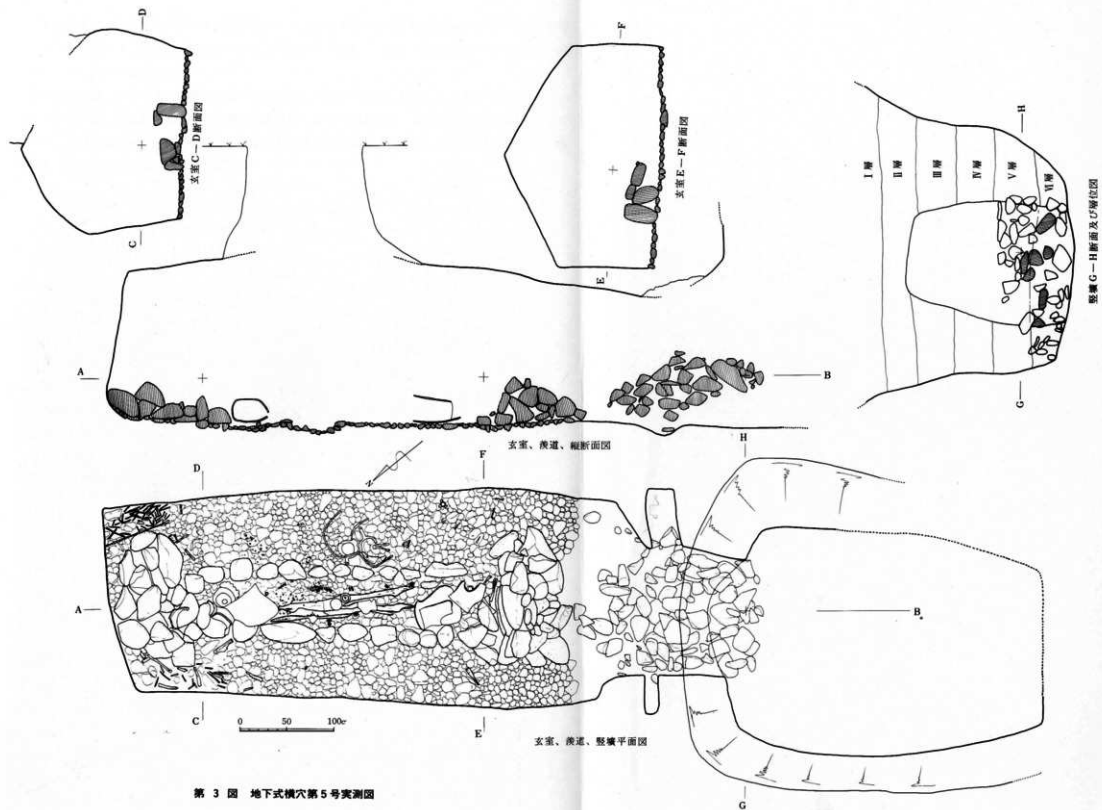
第Ⅲ層 褐色土層(褐色ルーム)、厚き43cm

第Ⅳ層 第Ⅱオレンジ層(ノコクス)、厚き40cm

第Ⅴ層 褐色スコリア層(栗オコシ)、厚き45cm

第Ⅵ層 赤褐色土層(岩オコシ)、厚き30cm

第Ⅶ層 淡褐色土層(淡褐色ルーム)未掘



第 3 图 地下式横穴第 5 号实例图

地下式横穴は、第Ⅱ層の黒褐色土層を天井部とし、第Ⅵ層の赤褐色土層を床面にして構築されている。こうした土層は、それぞれの土質が適当な湿気を含んでおり、かなり強固に羨道及び玄室の空間を保ちえていたものと思える。

宮崎県西南部に分布する地下式横穴は、ボラ層や、砂礫層を床面にしており、吸水性にも富んでいるが、この下北方台地の場合、下部土層が粘質土層であるため吸水性にかなり悪いむきがある。したがって、玄室内部における小円礫の敷石は単なる構造的なものではなく、そうした湿気についての配慮もあったものではないかとの感もする。

第3章 遺物

1. 装身具(第4・5図 図版16)

金製垂飾付耳飾(第5図①②)

直径1.7cm、断面径1.8mmの親金環に、球形根紐玉を通した一条の兵庫鎖を繋ぎ、その先端に、心葉形垂飾を下げた耳飾である。鎖の長さは、①で4.8cm、②の方は繋手部分の切断もあり現長3.7cmを測る。根紐玉は、①では1.2乃至1.3cmの間隔で4個を数え、②は、1.4乃至1.5cm間隔で3個が現存する。根紐玉の径は約4mmである。心葉形垂飾は、①の方が先端が細く尖った感じを与えるが、長さ1.7cm、最大幅1.2cmで、大きさには差がない。心葉形垂飾の周辺は、細かな刻目を刻んだ金線で縁飾りされているが、①より②の方が刻目が緻密で、細工の差を示している。

金製垂飾付耳飾の県内での出土例は、児湯郡高鍋町待田古墳群第28号墳があるが、完形品で地下式横穴からの出土例は本品が初めてである。

玉類(第4図、5図)

副葬されていた玉類には、勾玉、管玉、丸玉、変形半円玉がある。大半が屍床内で検出されている。

勾玉(第4図①~⑨) 硬玉製の大形勾玉2個(①②)、紫水晶製勾玉2個(③④)、小形の碧玉製勾玉5個(⑤~⑨)の計9個を出土している。

①②の硬玉製勾玉は、実測図に示す通り、大形の丁字頭品であり、①には3条、②は2条の刻線が刻まれている。頭孔は、両側面より中央に向けて穿孔した双頭円錐形となっている。①が比較的均衡のとれた頭尾形をしているのに対し、②の方は、やや頭部が大きく、尾端は内側に少し尖った丸形となっている。色は、①が乳白色に緑色を帯び、②は淡緑色の色調を呈する。研磨度は、両者共にさほど高いとはいえない。計測値は、①長さ4.8cm、径1.8cm、幅1.6cm、②長さ5cm、径1.6cm、幅1.3cmで、断面は①より②が扁平である。

③④は、淡い紫色を帯びた透明の美しい水晶製勾玉である。頭尾の形態差が少なく、頭孔は片側穿孔になっている。長さ2.3~2.4cm、断面径0.9~1cm。

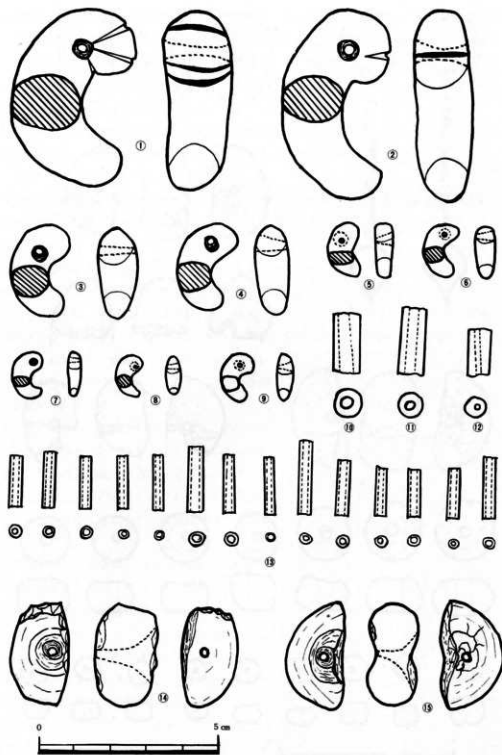
⑤~⑨、碧玉製勾玉で、鮮やかな緑色を呈する。体は曲りも少なく角ばっており、長さは、⑤⑥の1.5cmを最大として、⑧の1.1cmと小さい。断面は扁平で長方形に近く、径0.5~0.7cm、厚さ0.4cmを測る。頭孔は片側穿孔の円錐形となっている。

管玉(第4図⑩~⑬) 管玉は総数26個を数え、赤褐色の光沢を有する瑪瑙製管玉2個(⑩⑪)、濃紺のガラス製管玉1個(⑫)、残りはすべて淡い緑色を呈する碧玉製管玉(⑬)である。

⑩⑪の瑪瑙製管玉は、径0.6~0.7cm、長さ1.7~1.8cm。⑫のガラス製管玉は、管径0.6cm、長さ1.2cm粗雑な製品である。

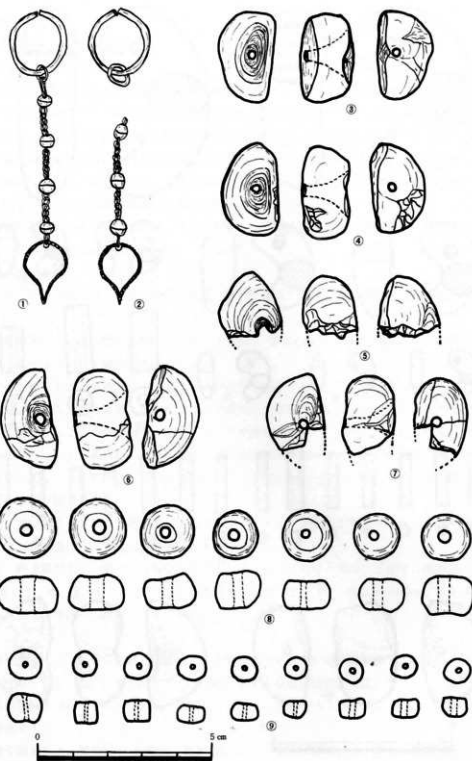
⑬の碧玉製管玉は、管径0.3~0.35cm、長さは1.3cmから2cmの間にあり、円筒状に穿孔された精巧な管玉である。

⑩⑪が屍床北寄りの玉類の中に混在していたのに対し、⑬の碧玉製管玉の大半は、屍床外東側の敷石上に一塊の状態出土している。



第4図 装身具実測図(I)

(勾玉①~⑨、管玉⑩~⑬、変形半円玉⑭⑮)



第5図 鍍金具実測図(Ⅱ)

(金製鹿角付耳輪①②、変形半円玉③④、大形丸玉④、丸玉⑤)

変形半円玉(第4図③④、第5図③④) 紺青色のガラス製品で8個出土している。形態から、型とりされた直径2.5cm内外の円形玉を、完全に冷え固まらないうちに半截成形されたと考えられるガラス玉である。半円形の球面は滑らかで光沢を有するが、截断面は粗く不規則で、部分的に黄白色の不純物の付着するものが多い。縞孔は片側から漏斗状に穿孔されているが、位置の片寄りや、穿孔された漏斗状の上面のゆがみ状態は、穿孔孔、円形玉半截前になされていたことを示している。各半円玉の計測値は第1表の通りである。

このような半円玉は、本地下式横穴の墳丘北側に陪発見された3号地下式横穴から1点の出土例があるだけで、他に類例を見ない。地下式横穴の副葬玉類として新たな資料である。

丸玉類(第5図④⑤) 紺青色のガラス製である。大小あり、見かけ上も大きい直径10mm以上厚さ8mm以上の光沢のある扁球体の丸玉を大形丸玉、それ以下の小形のを単に丸玉とした。

大形丸玉(④)は、57個ほど出土している。最大のものは径1.75cm、厚さ1.1cmを測る。縞孔はいずれも円筒状に穿孔されており、孔径はほぼ3mmである。穿孔を中心に、球体に同心円状の筋のみえるものや、孔と直角方向に横割れしたものがあり、いわゆる巻付法成形によることを示している。57個の計測値は第2表に示した。

丸玉(⑤)の方は、総数540個を数える。形は、白形、円筒形など様々で、球体をなすものはほとんどみられない。色は濃青色或は紺青色を呈する。中に、孔と平行して縦に白色筋の通るものがある。この白筋は成分によるものと推定されるが、成因については究明できなかった。

古墳時代のガラス玉類は、ほとんどがアルカリ石灰ガラスといわれている。そこで、変形半円玉と大形丸玉の化学分析を宮崎県工業試験場に依頼したところ、第5表に表示したような分析結果が報告された。これによれば、半円玉も丸玉も共にアルカリ石灰ガラスであり、珪素(SiO₂)と、ナトリウム(Na₂O)を主成分としている。次に多い成分が、アルミニウム(Al₂O₃)、カルシウム(CaO)、マグネシウム(MgO)、カリウム(K₂O)などである。成分比に若干の差はあるが、この成分構成は両者に共通した傾向といえる。両者の成分比で注目されるのは、半円玉では微量成分である酸化銅と酸化鉛が、大形丸玉では含

	長さ	短径	厚	備考
1	27	16	16	
2	29	16	13	
3	24	15	13	
4	25	15	12	
5	26	15	13	
6	29	15	14	
7	—	15	13	一部欠損
8	—	16	14	一部欠損

第1表 変形半円玉計測値(単位mm)

径	厚	孔径	備考	径	厚	孔径	備考
1	17.5	11	4	30	15.0	11	3
2	16.5	14	3	31	15.0	10	3
3	16.5	11	3	32	15.0	10	3
4	16.0	10	5	33	15.0	11	3
5	16.0	11	3	34	15.0	11	3
6	16.0	10	3	35	14.5	9	3
7	16.0	9	3	36	14.5	9	3
8	16.0	10	4	37	14.0	10	3
9	16.4	—	半欠	38	14.0	10	3
10	16.2	—	半欠	39	14.0	10	3
11	16.0	—	半欠	40	14.0	9	3
12	16.0	—	半欠	41	14.0	10	3
13	16.0	—	半欠	42	14.0	10	3
14	15.0	12	3	43	14.0	10	2
15	15.0	10	3	44	14.0	8	3
16	15.0	9	4	45	14.0	8	3
17	15.0	11	3	46	14.0	9	3
18	15.0	10	3	47	14.0	11	3
19	15.0	10	3	48	13.0	9	2
20	15.0	11	3	49	13.0	8	3
21	15.0	9	3	50	12.0	10	3
22	15.0	11	4	51	12.0	9	2
23	15.0	9	3	52	12.0	10	2.5
24	15.0	10	3	53	11.0	8	2
25	15.0	10	2	54	11.0	10	2
26	15.0	9	3	55	10.0	10	2
27	15.0	10	3	56	10.0	8	2
28	15.0	11	3	57	10.0	8	2
29	15.0	10	3	平均	16.0	9.88	9.9

第2表 大形丸玉計測値一覽(単位mm)

試料	変形半円玉		大形丸玉
	組成	比重	
二酸化珪素	SiO ₂	64.95	66.07
酸化ナトリウム	Na ₂ O	12.79	14.81
酸化アルミニウム	Al ₂ O ₃	2.30	2.23
酸化カルシウム	CaO	2.31	3.90
酸化マグネシウム	MgO	1.53	1.09
酸化カリウム	K ₂ O	1.18	0.75
酸化鉄	Fe ₂ O ₃	0.86	1.09
酸化銅	CuO	0.071	0.274
酸化鉛	PbO	0.069	0.274
酸化バニリン	CoO	0.065	0.088
酸化マンガン	MnO	—	—
酸化ニッケル	NiO	—	—
酸化亜鉛	ZnO	—	—
計		87.209	90.642

第5表 出土ガラス玉の化学組成

※化学分析は、宮崎県工業試験場試験公署、太田一徳氏による。

・大形勾玉3種の玉類は、57個の大形丸玉を軸に連続された一連の頸飾ではなかったかと考えられる。いま仮に、この3種を一連に連続すると、70cm前後の長さになり、頸飾として恰好の長さになる。ただ、重量が300gとなり、頸飾としては少々過重といえる。

これに対し、540個の多量の出土をみた丸玉は、尻床中央部東寄りの部分に最も集中していたが、ほぼ尻床全域から検出されている。このような散乱状態は、すでに埋葬時に玉緒が切り離されていたことを予想させるものである。540個を一連にした場合長さは3.4mにもなり、少なくとも2条乃至3条の玉飾ではなかったかと推定される。

- ※1 梅原末治「持田古墳群」宮崎県教育委員会 44年 「もと重飾があった」とされ、報告書では金環だけになっている。
- ※2 石川恒太郎「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集 宮崎県教育委員会 47年 「ガラス製勾玉」として報告されているが、博物館保管の現物を見る限り、ガラス製半円玉に間違いない。
- ※3 小田幸子「ガラス工」P. 153の付表による『考古学講座9特論』雄山閣 46年版

2. 鏡 (第6図・図版21)

変形銀鏡と変形紋鏡の二面を出土している。共に尻床中央部の西寄りの剣上に、変形銀鏡は鏡背を上面にして、変形紋鏡は鏡面を上にして磨飾されていた。

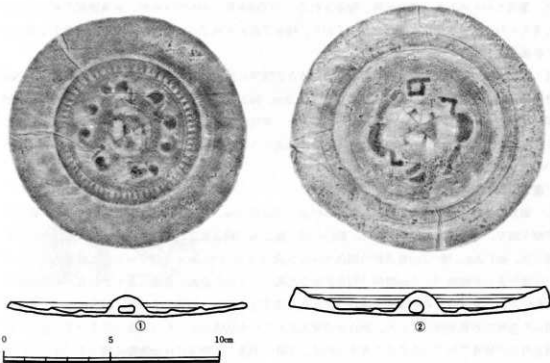
変形銀鏡 (第6図①) 面径11.24cm、縁厚3mm、反り4mm平縁の鉛白銅色の鍍製鏡である。一面に朱の付着する鏡背には、径2cmの円座鈕をめぐり、乳とも獣形とも判然としない完全に変形した獸形紋を浮き出している。獸形はすべて勾玉状をなし、2個づつ連なったものが4個あり、そのほかの浮彫を乳とすれば、四獣鏡の変形とも考えられる。獸形をめぐって2列の突起帯がめぐり、内側には変形して歯状になった歯状文帯が、外側は歯状文帯となって外区の葉文帯に続いている。

このような小形の変形銀鏡の地下式横穴からの出土例としては、国富町六野原の地下式10号と、えびの市小木原1号、があげられる。六野原10号は肩庇付冑を、小木原1号は陶色古窯址群TK47相当の須恵器を伴っている。

変形銀鏡 (第6図②) 鏡面径12.1cm、縁厚8mmの肥厚した平縁を有する、比較的錆化度が低く、鏡面に光沢をとどめた鉛白銅色の鏡である。鏡背には、径2.5cmの円座鈕を囲んで電体と考えられる2体の変形紋を左右に浮彫にし、その間に方形状と勾玉状の異形紋を配している。内区をめぐり銘帯区を設けているが、銘文は記されていない。その外側に歯状文帯があり、一段高く肥厚した外区には複線波紋の帯だけを飾っている。内区主文の2体の変形文、口を開いて相追の双頭の龍体を表現しているとも考えられ、空間の異形文の配置といふ変形銀鏡と受け取れないこともない。

※1 「六野原古墳調査報告」史蹟名勝天然記念物調査報告第13輯 宮崎県 19年

※2 「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告1」宮崎県教育委員会 47年



第6図 鏡実測図及び拓本
〔変形銀鏡①、変形紋鏡②〕

3. 武器

直刀・剣 (第7図・図版22)

副葬されていた直刀と剣は、図上復元されたものを含め剣3振、直刀2振を数える。お互に錆着が著しく、保存状態は良くない。

剣 (第7図①~③)

① 全長107cm、刃長86cm、刃幅5.7cm、厚さ0.5~0.8cm、広峰大振りの剣である。剣身断面は重ね薄く錆もなく扁平な紡垂形を呈する。茎は長さ20cmほどで、柄木をはめ、その上を紐の葛巻にしていた跡が残る。柄元から約8cmの位置に目釘孔1個が認められる。間は両開定角式とおもわれるが、鹿角装と見られる角質の残痕が付着しているため明確ではない。剣身の処々に、鞘木の木質部が残っており、薄手両合せの鞘木のあったことを示している。

② 数ヶ所で折断しているが、ほぼ全形を知り得る。全長81.3cm、刃長63cm、刃幅4.8~4.4cm、厚さ0.9cmで、錆は明瞭でない。①に比べ全体的に小振りである。茎は、幅1.9~2.3cm、長さ18.5cm目釘孔は2孔が、6.7cmの間隔で、柄元から約7cm、茎尻から4cmの位置にある。茎尻は一部に欠損があるが、栗尻とおもわれる。間は両開と推定される。①同様角質の錆着がみられ、鹿角装剣であったものと考えられる。剣身には木質が錆着しており、鞘木に納められていたことがわかる。残存する木質から断面径2cmほどの鞘が予想される。

③ 錆化が甚だしく、且つ数片に折断しているなど保存状態が最も悪い。剣鋒を欠ぎ、現存長は76cm、身幅約3.8cmの細身の剣である。茎は、長さ14.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを測る。柄木の副えられた柄間は糸巻されていたらしく、側面に痕跡が見える。栗尻の茎尻から3.5cmあがった位置に目釘孔がある。間は、厚く錆で覆われ定かでない。剣身に錆着する鞘木残痕から、幅5.8~6cm、厚さ1.8cmほどの両合せの鞘が考えられる。

直刀 (第7図④⑤)

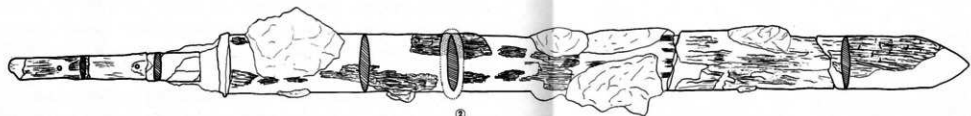
④ 銀装の柄飾を残す直刀である。現存長91cm、刃長75.3cm、刃幅3.8cm、背厚0.8~0.9cm、細身の平棟平造で、切先にはふくらが付く。鞘口には、幅2cmの銀造素文の口金具がこの。鞘口金具の片側には、縦1.2cm、横0.7cm長方形の切込がみられ深かなにかの嵌まされていたことが考えられ、把は欠損が多いが銀装で、3mm間隔で剣を打出した幅3~4mmの銀線が葛巻にされている。この銀線の打出しが、一見連続された小玉を纏いつけた感を呈する。現在、柄頭はないが、銀装内部に、片側の開いた方形の木質が残っており、柄合せで挿入されていた柄頭のあったことを示している。恐らく環頭あたりが装着されていたものと考えられる。刀身に錆着する鞘木には金物類は残っていないが、鞘口金具から約30cmほどの鞘中央にあたる位置に、鞘木をひとめぐりする幅5mmの溝状の痕跡があり足金物か胴金のあととおもわれる。

柄頭がないだけに環頭大刀とは断定できないが、打出し銀線の柄飾など地下式横穴出土の直刀としては注目される資料であろう。

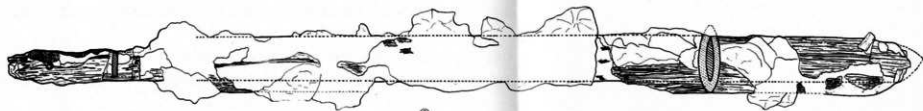
⑤ 玄室右奥に副葬されていたもので完形に近い。全長は89.2cm、刀身は74.5cm、身幅3.3cm、棟厚0.9cm、平造細身の直刀である。栗尻の茎は、長さ14.7cm、幅2.5cm、厚0.7cmで、約6cmの間隔で2ヶ所に目釘孔がある。間は切り込みの浅い両開で、棟、刃共に同様の切り込みをしている。



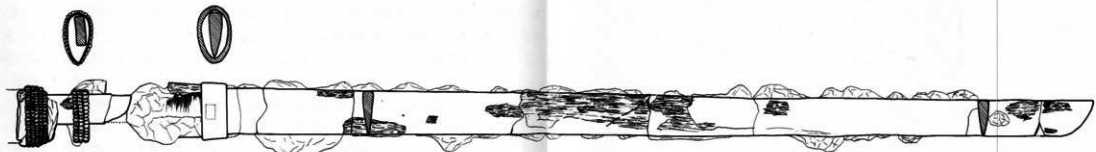
①



②



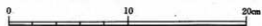
③



④



⑤



第 7 图 武器实测图 (I) (剑①~③、刀④⑤)

鉾 (第8図①~⑤)

- ① 鉾の先端部を欠くが、鑄の通った身幅の広い剣身形の鉾が予想される。身は断面扁平な菱形を呈する。現長31cm、身幅は中央で3cm、厚さ1.2cmを測る。鍔首から袋基端までの長さ約20cm、袋は歪みのある円錐形を呈し、基部の断面内径2.5cm、深さ13cmである。基端に三角形の袈りがみられる。
- ② 鉾と、基端の一部を欠くが、ほぼ全形を推定できる。現長は36.8cm、推定全長は39~40cmとなる。鑄造り、断面菱形の穂の長い細身の鉾で、身の長さは25cmを越す。身幅は1.7cm、身厚1.3cm。袋部は長さ11.5cm。断面楕円形で袋の深さは10.7cmを測る。基端は一部欠損があるため明確ではないが、①と同じく三角形のくり込みとなるものと考えられる。基端より2cm上方に目釘孔とみられる孔径3mmの穿孔がある。細身ながら厚みもあり、穂の長い本品は、刺突を目的とする鉾としては、最も鋭利な形態といえよう。
- ③ 丁度鍔首部分を欠くため長さに疑問が残るが、推定復原長25cm前後で穂が短かく、④とほぼ同形の鉾と考えられる。現存する穂は長さ13cm、鑄造で、身幅は1.5cm、厚さ0.9cmである。袋は円筒形に近く内径1.7cm、袋内には柄木が残る。基端は三角形くり込みである。袋部の外面には鞘木が鑄着しており、基端から1cm上方で真直に切断線がある。恐らくこの位置に鞘止めがあったものとおもわれる。
- ④ 唯一の完形品である。穂が短かく、全長は22.1cmである。鑄造り断面菱形の身幅は1.6cm、厚さ1.7cmを測る。袋は断面円筒形であり、袋の内部には木質が残されている。基端は三角くり込みとなっている。
- ⑤ 石突である。全長16.5cm、袋は断面内径2cmの円筒形を呈し、深さ7.7cmを測る。

この石突が、どの鉾と対をなしていたのか明らかでないが、出土位置からみて、①・②の鉾いずれかと対をなしていたことは十分に考えられるところである。出土位置から穂袋と石突を結ぶ長柄の距離を測ると、①とでは2.6m、②では3.2mとなる。長さからいえば②はやや長すぎる気もするし、袋の内径、断面形から考えても①との組合せが妥当に思える。

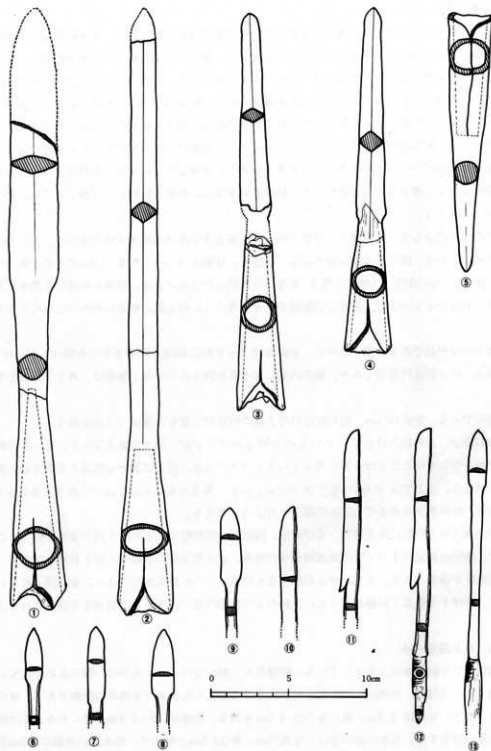
地下式横穴からの鉾の出土例は、えびの市、国富町、田野町など6ヶ所6例が挙げられる。これらは共に、横切板鋏留短甲やf字形鏡板組合せの馬具、或は和泉期の土師式土器と共伴しており、時代的な共通性が指摘できる。また、鉾を副葬するものは、一つの群集地内では一二基に限られていることなど、共伴する豊富な副葬品とともに、鉾のもつ集団内部での地位との関連など注目される点である。

鉄鎌 (第8図⑥~⑬)

長頸鎌ばかり約50本余が出土している。形態から二類に分けられ、大半は一類で占められている。

I類 (⑥~⑨⑬) 逆棘のない片丸造剣形式或は横葉式ともよぶべき細身の鉄鎌である。身に長短があり、短いものは3.2cm、長いものは4.9cmを測る。身幅は1.0~1.4cmの間にある。⑥は短身、⑦は長身に該当する。完形に近い⑧は、全長19cm、身は3.5cmと短かく、片丸造の身幅は1.2cmである。寛被は長さ11cm、幅0.5~0.7cm、断面長方形で真直な状態のまま茎に続いている。重量27gである。

II類 (⑩~⑫) 鑄着したものもあるが、出土総数は15本ほどで、全体に占める割合は少ない、脇袂の深い片刃矢式である。刃が長く、刀身形を呈する。片刃の長さ10.3cm、断面三角形の身幅は0.9



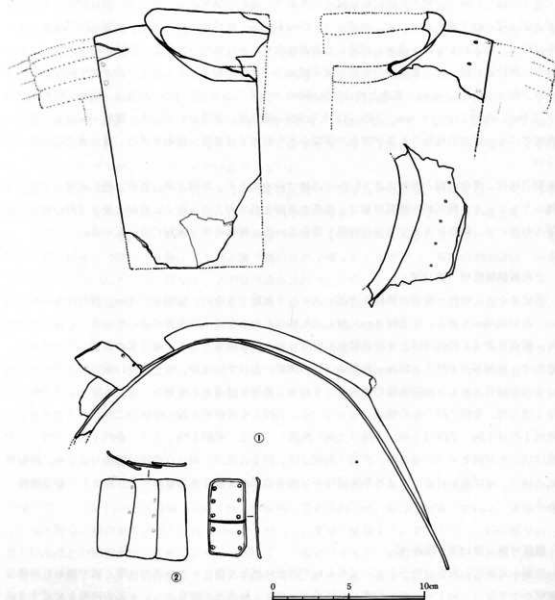
第 8 図 武器実測図 (II)
 (鉄①~⑤、鉄鏃⑥~⑬)

~1.1cmにあり、背厚は0.3cmである。莖は角形で、幅0.6~0.8cm、厚さ0.4cm、長さは4.5cm内外で茎の方に向かって広がり張り出した形を呈する。(⑬)重量30g。

一見、刀子をおもわせるような大形の片刃矢鏃は、えびの市島内平松の地下式横穴出土の平根片刃矢式のほかに地下式横穴の副葬品には類例をみない。

※ 1 石川恒太郎「えびの町平松の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第14集

宮崎県教育委員会 44年



第 9 図 武器実測図 (I)
 (銅甲①、小札②)

4. 武 具

短甲 (第10図・第11図・図版17)

短甲は、尻床の南端に副葬されていた横板鉄留短甲と、尻床北側に 肩庇付背や顔甲などと接して副葬されていた三角板鉄留短甲の2領がある。

横板鉄留短甲 (第10図)

堅上3段、長側4段構成の横板鉄留短甲であり、前胸右開閉となっている。錆化が著しく、前胸部表面は厚い錆で覆われている。計測値は、後胸高45cm、押付板の幅45.5cm、前胸高34.5cmである。押付板は、ゆるやかな弧を描き、両肩にも急激な曲りのみられない大形で、縦幅13cmを測る。これに対し、押付板に継ぐ堅上第2段の地板が狭く幅 6.5cmと押付板の半分しかないのが特徴的である。帯金は、堅上3段が4.3cm幅、長側2段は4.5cm幅の一枚通しとなっている。地板は、前胸には堅上2段で5.8cm、長側1段が6.4cm、3段には5.5cm幅の横板が使用されている。縦板の幅は8cmである。内幅では6cm前後の地板であるが帯金で鉄留された外面では帯金と地板との幅には大きな差はみられない。

後胸の地板と帯金の幅の外面比は、1.2～1.3倍で差が小さく、地板2段(長側1段)は逆に帯金より狭くなっている。胸右脇の開閉装置は、皮革を方形金具で押えたもので、長側1段と3段の堅板に鉄留されている。鉄数は4本で金具の四隅を留めている。覆輪は革包覆輪になっている。

三角板鉄留短甲 (第11図)

錆化著しく、地板・帯金の構成など部分的にしか観察できない。後胸高45.5cm、押付板左右幅44.5cm、前胸高34cmを測る。帯金幅3cmに対し地板幅は6cmと2倍の外面比になっている。右脇開閉となり、開閉装置は、長側3段と4段の堅板に取付られた皮革蝶番である。縦4本の鉄留が用いられている。地板は、前胸長側1段と3段は三角板各三枚の構成となっているが、堅上2段に横板が用いられているのが注目される。後胸各段の地板は、すべて三角板が使用されており、上から堅上2段3枚、長側1段5枚、長側3段5枚の構成になっている。各段とも後胸中心線に中央の三角板の頂点をそろえ地板1段は上向、2段は下向、3段は上向に配置している。前胸も同じように長側1段と3段の三角板は頂点を対向させているため、引合と長側2段、帯金の交点に向った斜線が描かれている。押付板の上縁は、ほぼ水平に近く、三角板鉄留短甲に通有る形状を呈する。覆輪は上下縁ともに革包覆輪である。

肩庇付背 (第12図・図版19)

鉄製小札鉄留の肩庇付背である。これも短甲同様錆化が著しく、外面は厚く錆で覆われ詳細な観察ができない。わずかに錆を剥離した外面の一部と、鉢内側の観察から、本品の特徴を記述する。

鉢 伏鉢・銅巻板・腰巻板に、地板の小札を上下2段に内側より押あて鉄留したものである。小札は、前胸中央の小札を中心にして、後頭部中央の小札に向って左右対象に、重ね目が後方に向くよう並べて一枚ごとに伏鉢と銅巻板、銅巻板と腰巻板に鉄留されている。地板を押える銅巻板には幅3

cm、腰巻板は4cm幅の一枚板が用いられている。銅巻板は後方中央に、腰巻板は右側面中央に合せ目がみえる。小札枚数は、地板一段が、前胸中央より右側へ24枚、左側へ23枚を加え、前後の中心の小札を加え総数49枚が用いられている。地板二段には、左右各24枚、前後の2枚を加え合計50枚の小札を用いている。総数で一段の方が二段より一枚だけ小札数が少ないことになる。使用されている地板小札は、幅1.5～1.7cm、長さ 4.5cmの長方形板の上下両端の片側角をおとした形状の大ききである。小札によっては角の削りに大小がある。ことに一段の小札は二段の小札より削りが小さく、中には大きく削られて孤状を呈するものもみられる。結局、伏鉢との接合面の曲りをとるために小札の上端を著しく集約しなければならない製作技術上の措置といえよう。小札の重なりは3～5mmと推定される。伏鉢・銅巻板・腰巻板との重なりは小札によって高低があるため、鉄留の列にわずかながら上下のずれや、開閉の広狭がみられる。しかし、外面での銅巻板の鉄留には極端な乱れは感じさせない。鉢の内径は、前後径20.5cm、左右径19cmを測る。頂辺の伏鉢は、長さ12cm、短径約10cmの楕円形を呈する。

伏鉢・受鉢 伏鉢は径5cm、高2.5cmの半球体である。伏鉢上方に出ている管金の長さは1.5cm、管の基部は二翼され、伏鉢の内側に穿孔折り曲げて固定している。受鉢は、管の頂に鉢底の一部を残すだけほとんど欠損しており、完形は定かでない。

盾底 透形のある九花輪の盾底である。透形は三角形とM字形からなる。外縁に沿った側には頂点を内に向けた三角形の透を、鉢に沿った内側にM字形の透を、その中間に小三角形の透を配している。外側の三角形の透形は9個で、それぞれ花輪の中央に1個宛配置した形になっている。盾底のL字形鉄留の腰板との取付け状態は、外面を覆うため全貌は明らかでない。盾底の計測値は、中央部で庇の長さ 7.5cmである。鉢をめぐる円弧の長さは27.8cmとなっている。

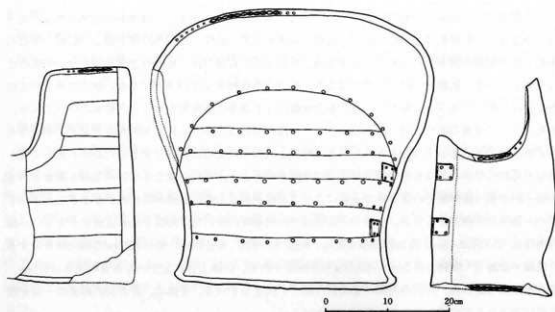
鍔 4段の板鍔である。完全に錆着しており、腰巻板との縦じ付けや、各段ごとの縦じ合せなど明らかでない。縦鍔は側面幅 3.5cm、後方中央部は約10cm幅の横扶がみられる。

小札鉄留式の肩庇付背は、これまでの国富町六野原地下式横穴群の8号と10号、それに、宮崎市村角の3例が知られている。この3例の肩庇付背に比べると、本品は地板一段と二段の小札枚数に、すでに不一致があるとはいえず、鉄製小札鉄留式の肩庇付背としては、いまだ省略も少ない、精美な背の一つといえよう。

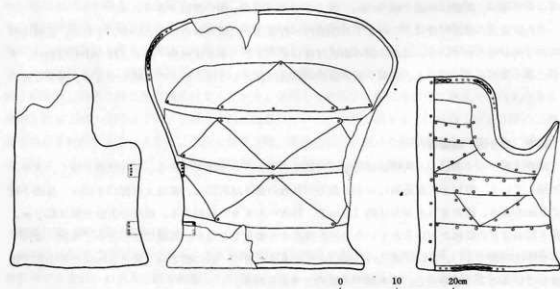
頸甲 (第9図、図版18)

副葬位置からすれば、三角板鉄留短甲の付属品と考えられる頸甲である。保存状態が悪く、大半が欠損している。肩口から前胸胸にかかる長方形鉄板の長さは約22cm、幅は上部肩口で10cm、前部下端で9cmを測る。襟の立ち上がりは約 1.2cmで、外方へわずかに傾斜する。前後の引合せ板は幅9cm、長さ12cmほどの鉄板が用いられていたことが残片から推定できるが、鉄留であったか、革綴になっていたかは明確でない。肩口に感孔の5個の小孔がある。肩の一部に幅2cm、長さ5cmほどの小札が錆着しているところをみると、小札肩甲の感孔と考えられる。

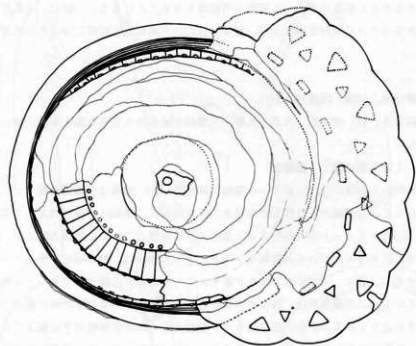
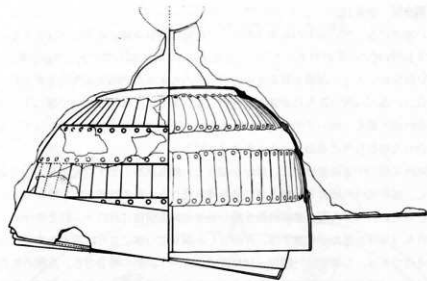
地下式横穴から出土した頸甲としては三番目である。これまでに出土しているのは、国富町木塚塚原と、えびの市上江小木原である。塚原では、三角板鉄留短甲に付属して、小木原では、横板鉄留短甲に付属しており、どちらも衝角付背を伴っている。



第 10 图 武具実測図 (II) (横切板鍔留短甲)



第 11 图 武具実測図 (III) (三角板鍔留短甲)



第 12 图 武具実測図 (IV)
[扇底付青]

小札 (第9回、図版18)

錆着しい塊状になっているものもあるので、一枚毎に員数を確かめることはできないが、総数にして、およそ150枚近い小札が出土している。小札は、ほとんど同形で、長さ5cm、幅は2~2.5cm片端の幾分広い短冊形である。四隅が若干丸みをもつものもあるので隅丸状の長方形ともいえる。小札の縦じ合せ孔は、長辺両側に各5孔が穿孔されている。また或孔は、短辺の片側に1孔が確認できる。小札の長辺両側縁が裏面に向かってやや内反するため、小札全体が湾曲した形となっている。このため小札を縦じ合せた場合自然に曲面がつくられることになる。

小札は、尻床北端の甲冑副葬付近に、原形を留めない散乱状態で出土しており、元の姿は明らかでない。しかし、頸甲肩口の錆着や、横5列に錆着塊状化した小札の状態から判断すると小札肩甲ではなかったかとおもわれる。ただ、横短鉄板を縦じ合せた肩甲同様に肩口から肘まで十分に覆うためには、採集された150枚前後の小札数では、片側分しか満せない事になり、肩甲とするには疑問が残ることになりそうである。しかし、一段12~14枚綴りで、6~7段綴の場合だと、片側の小札数は70~80枚、両側で140~160枚の小札数で間に合うことになり、採集された小札数とほぼ一致することになる。臆測にすぎないかもしれないが、一応肩甲の可能性もあることになる。一般に、小札肩甲が短甲に共存する例が少ないだけに検討を要するが、頸甲と共に、三角板銀留短甲に伴った小札肩甲としておきたい。

5. 馬具 (第13回、14回、図版20、21)

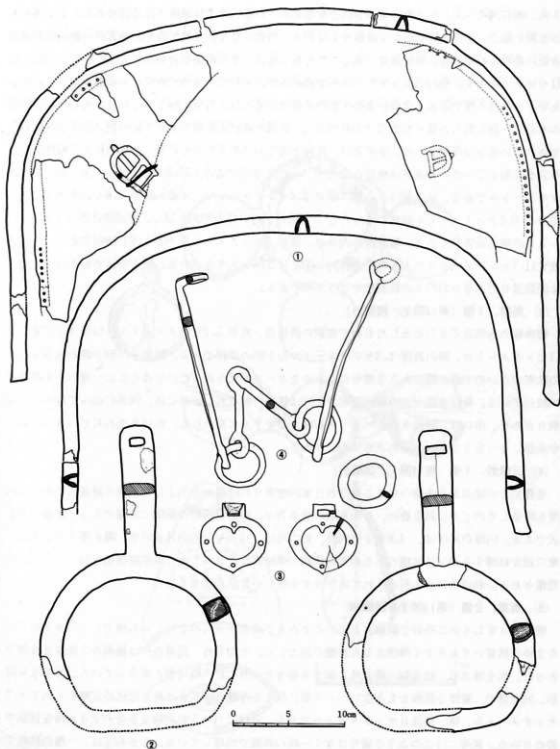
馬具類は、鞍金具、鍔、轡鏡板、杏葉、馬鐙、三環鈴で尻床外の玄室東側中央部に概ねまとまって副葬されていた。

(1) 鞍金具、1背 (第13回①、図版20)

鞍金具は、鉄板装木製鞍につけられていた覆輪と磯金具・轡で、覆輪は両輪とも残っていたが磯金具は後輪に見られるだけで前輪からは残欠片も発見できなかった。覆輪は、縁辺の丸いV字形断面幅は両輪とも約1.5センチメートル内外である。各所に木質が残っている。前輪の高さは、28.5センチメートル、一方の爪先が欠けているが幅42センチメートル、後輪は、高さ36センチメートル、幅49センチメートルである。磯は、一枚鉄板で中央が若干ふくらみ端部には幅8ミリメートル程の鉄帯が廻り縁どりされている。この磯金具は、幾つかの残欠片として出土しているがその中に縦がついたままのものがある。その造りをみると座金の施設はなく、鉄錠具をそのまま鉄板の下に挿こんで仕上げている。したがって脚の状態も不明である。ところが、これに相対する金具と見られる錠具が両所から出土しており脚の部分を知ることができる。磯の鉄板からはずれたらしく針のついた梁の下に錠具の上下を分けるように鉄板が付着している。これにも座金の施設はない。脚部は付着した鉄板の下方向が両端が小さく環状に曲げられており、その両端間を細い鉄線で両環の中をととして方形状に二回巻きしている。

(2) 鍔、1組 (第13回②、図版20)

鍔は、木心鉄装輪鍔一組で、鞍橋の両輪と重なって出土した。①は、前輪と重なって出土した方で発見時は完形であったが、取上げの際、一部が崩壊し欠損部分が生じたものである。高さ25センチメー



第13回 馬具実測図 (I)

〔鞍金具①、鍔②、杏葉③、轡鏡板④〕

トル、幅17.4センチメートルで全面鉄板で被包されている。吊手は前向きに著けがあり、上下部ともほぼ同じ幅で、断面は隅切凸レンズ形をしている。頂部は丸く作られており、長方形の鍔状穴が前後方向にあげられている。輪状部は、木心をもたずに曲げて作り断面は台形状になっている。内径、縦11センチメートル、横13.5センチメートルで踏み込部が欠けているので害受けの溝留が設けられていたかどうかは不明である。全面、木心を鉄板で被包しており、釘留が施されていると思われるが側面の木心の一部に釘穴が見られるだけで鉄板の上に釘頭を確認する事ができずどの面にどのように釘打ちされているかは不明である。②の方は、後輪と重なって出土したもので、発見当初から輪状部の下半分が欠失しているのが高さも推定となるが、①とほぼ同じ高さの25.5センチメートル、幅も17.7センチメートルである。吊手部は、上端の幅が2.8センチメートル、下部の幅が2.6センチメートルで下方が0.2センチメートル程狭くなっただけで筋形に近い長方形を呈し、断面形は厚さ1センチメートルの隅丸長方形である。輪状部の内径は、横13.5センチメートルで①と同じ横幅であり、縦は、推定11.7センチメートルの大きさで全体的に①とほぼ同じ大きさである。断面形は方形を呈している。全面鉄張りであるが釘打ちの状況はやはり不明である。

(3) 馬鐙、1個 (第14図②、図版21)

鞍後輪の南側近くから出土したもので青銅の鑄造品。高さ5.7センチメートル、口径(下辺幅)4.7センチメートル、舞の長径1.3センチメートルの小形の馬鐙である。鈕は半円形で舞の側面は肩部の段差がないで鈕の裾にあたる部分にかすかなカーブが見られるだけでほとんど一連のまま舞身部へ続いている。身は末広がりの扁円筒形で下辺は弧状に割られ、両面には、側面に沿って台形状に棒取りがあり、中には、鑄出されたいくつかの珠文がかすかに見られる。舌は失われているが、舞の中央部に4〜5ミリメートルの方形の穴がある。

(4) 三環鈴、1個 (第14図①、図版21)

馬鐙出土の地点から南側へすこしはなれた東側壁寄りの位置から出土した青銅の鑄造品である。円環を四分しその三方に鈴を著け、しかも鈴の著き方が、断面扁円形の銅環に短脚をもって接続する形式である。円環の外径は、4.6センチ内外、鈴の径は、2.8センチ内外を示す。環を垂下するため、常に紐を結縛する部分は欠損したため太い鉄線で補修が行われており長期間使用されていたことが想像される。鈴の中には小石が入れてあり今でも美しい音色が出る。

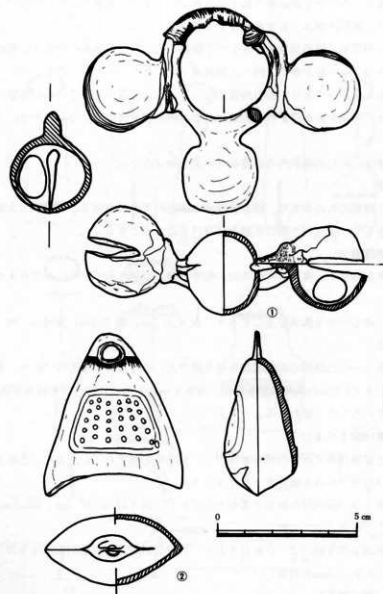
(5) 杏葉、2個 (第13図③、図版20)

轡などと束ねられた格好で副葬されていたとみえて両者がからみ合いしかも錆でくつきそれらにまた土砂が鈔着しており全く渾然とした状態で出土した。そのため、発見当初は鏡板かと間違える程であった。出土地点は、鞍後輪の鍔金具に接する場所である一方の鍔の輪状部と重なっていた。①も②も同形、同法製で、重厚な装飾をもたないハート形に属する杏葉で、高さは長方形の立間を入れて6.2センチメートル、横、長径6センチメートルである。外縁にハート形の鍔金を合わせ4か所を鉄釘で留めている。裏面にはこのような造りではなく一枚の鉄板で処理している。しかも①は、一枚の鉄板では不足したとみえて、その部分からもう一枚を重ね合わせ不足した部分を補充している。

(6) 響鏡板、1組 (第13図④、図版20)

全体が鈔着き、その上杏葉ともからみ合いしかも土砂が多量に鈔着しているのて細かい点について

は不明であるが、鉄製環状の鏡板をもつ二連式銜の要素なのである。引手は、径0.7センチ、長さ17.5センチの丸い鉄棒で先端は外方へ直角に曲がり、環状の引手壺になっている。銜は、各々径0.7センチ、長さ8.4センチの丸い鉄棒を環にして結び合わせた二連式で両先端は直接環状の鏡板に結合させている。鏡板は、一方が外径4.4×4.5センチ、他方が5.0×4.1センチの大きさである。なお、この環状鏡板の近くからみついている隅丸方形の鉄製品がある。おそらく立間であろうが、どのように鏡板と結合しているか現状では不明である。



第14図 馬具実測図(II)
〔三環鈴①、馬鐙②〕

6、農工具 (第15図、図版22)

古墳時代になると鉄材の増加にともない、農工具及び木工具、その他の種々の用途に応じた、器物の出現をみるのである。

下北方地下式横穴第5号も、例にもれず種々の農工具を出土した。それは、下記のごとくである。手斧、鉄斧 (大型と小型の2類がある)、のみ状鉄器、カギ状鉄器、鎌。

手斧 (第15図①)

羨道よりの死床に短甲が1領副葬されていたが、その手前から直立状の石槓に立てかけるようにして出土しており、保存状態は、あまり良好ではない。

形態的には、刃部から柄の部分までをすべて鉄材でつくっているものであり、刃部は、長さ10cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmの長方形で、柄との接線面で肩の張りをもつものである。

柄は、刃部から連なっており、50°角度をもって、弧状に曲げられている。弧状になる柄の先端部から柄尻までは、39cmを計る。また、直線的になる柄の部分は中空になっており、力学的にも強固のものとなっている。

こうした手斧は、未だ宮崎県内の古墳からの出土例はみない。

鉄斧 (第15図)

鉄斧には、2種類のものがあり、柄を装填する袋部の下で肩を張る、有肩式 (大形) と、袋部から、直線的に刃部をもつ、ずんどう形の小型とに分けることができる。

大形鉄斧 (第15図⑦)

これは、手斧と同じく、羨道よりの死床の短甲の傍に副葬されており、かなり大きく、重量をもつものである。

刃部先端は、ゆるやかな弧状をなしており、長さ6.7cm、幅7.2cm、断面は、厚さ1.6cmの長楕円形を呈している。

袋部は、厚さ0.6cmの鉄板の両側端部を折り曲げた、合せ目のあるものであり、長さ4cm、幅5.6cmで、内径は、4×1.2cmの長楕円形を呈し、深さ4cmである。袋部には木質部が残っており、木柄の装填が成されていたものと思われる。

小形鉄斧 (第15図②～⑥)

これらは、玄室奥の直立状の石槓の后方に一括して副葬されていたため、それぞれが錆着して、一塊となっていたが、6点を確認することができた。

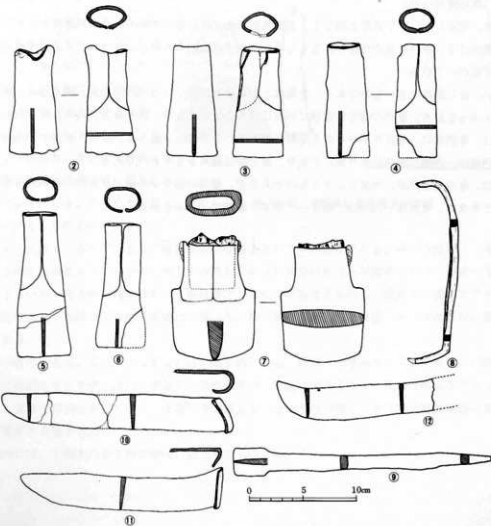
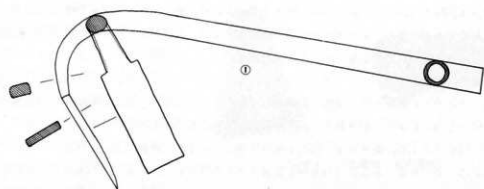
それぞれ、厚さ0.3cm内外の鉄板を素材としており、長さ13.5～10.2cm、幅5.1cm～4.0cmの長方形で一般的なものである。

袋部は、両側端を折り曲げて、合せ目をもち、内径3.2×2.2cm～3.8×2.1cmを計り楕円形の断面を呈し、深さは、4.5～5.5cmを計る。

のみ状鉄器 (第15図⑧)

これは、前述の手斧や大形鉄斧と同じ位置に副葬されていた。

長方形の断面をもつ細長い鉄棒の1端を打ち、身幅にしたもので、両肩の張りをもつ直刃の平のみである。



第15図 農工具実測図

(手斧①、鉄斧(大型⑦、小型②～⑥)、カギ状鉄器⑧、のみ状鉄器⑨、鎌⑩～⑪)

身の部分は、長さ 3.4cm で、幅 2.5cm、厚さ 0.4cm を計り、茎は、長さ 20.8cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm の長いものである。また、茎の端部から 4.8cm の部分まで、木柄が挿入されていたものと思われる。こうした、のみ状鉄器の出土も希れにみるものである。

カギ状鉄器 (第15図⑧)

これも、手斧や大形鉄斧と同じ位置に副葬されていた。0.6四方の正方形の断面をもつ細長い鉄棒の両端を同一方向にL字状に折り曲げて、コの字形を呈し、端部は尖がっている。

全長が、17cm で、1 端の長さ 3cm、他の 1 端は欠落しているが、現長 3.3cm を計る。

用途的には、同一平面にある 2 つの木材を緊着させる金具であり、かすがいの用途をもつものであろう。

鎌 (第15図⑩~⑫)

鎌は、前述した、小形鉄斧と同じく、玄室奥部の直立状石積みの後方に 3 本が副葬されていた。

形態的には、身の先端が外反りになるものと、やや直線的なものに分けられ、刃部は直線的で、先端が尖がっている。

№10、身に反りがないものであり、先端部と中央部が折れている。全長 2.2cm、幅 3.2cm、厚さ、峯部で 0.5cm を計る。着柄の部分は弧状に外側に折りかえしており、柄と身は、鈍角を成すものである。

№11、着柄部に、外反りがみられる完形品である。全長 19cm、幅 3cm、厚さ、峯部で 0.4cm を計る。着柄部は、内側に鉤状に折り返しており、身と柄は鋭角をなすものである。

№12、身の先端部が、外反りになるものであるが、基部の部分が欠損しており、着柄状況はみることができない。現長は、14.6cm、幅 3cm、厚さ、峯部で 0.3cm を計る。

7. その他の遺物

須恵器 (第15図、図版1)

玄室内から出土しているが、副葬されたものとは見られない遺物として、須恵器の破片 2 点がある。いずれも、玄室入口に近い方の障壁石の間から出土している。ほかに須恵器の副葬されていないことから、これが副葬品の破片でないことは明白である。あるいは、葬送儀礼に用いられた祭器の破砕されたものの一片と考えられなくはないが、この 2 点以外には、竪穴内部の埋土中にも、また周辺にも須恵器の破片は検出されていない。従って、破砕土器片とする確証はない。しかしながら、この 2 片が埋葬時か、それにきわめて近い時期にすでに石積の間に混入したものであることは、その出土状況から十分に考えられる所である。

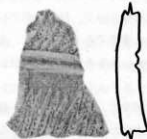
① 二本の沈線をはきで、上下に櫛播波状文が施文されている破片である。破片の側面に、焼成前の真直な切断面が見えることから、長方形の透しがあげられていたことが推定される。小破片だけに断定できないが、長方形の透しのあった器台破片ではないかと考えられる。櫛播きの波状文でみる限りは、えびの市小木原の 1 号地下式横穴に伴った、長方形と三角形の 4 段透しをかけた器台に類似が求められる。

② 杯の破片である。受部の立ちあがりは、高さ約 1.3cm、内側への傾斜はわずかである。口唇は、ほとんど傾斜もなく平坦に近い。受部も、ほぼ水平で、先端は鋭角をなす。底部は明らかでないが、体部にも急激な傾斜はみられない。体部下方の器表面にはカキ目が残る。全体的に器面調整は粗い。色調は青灰色を呈する。

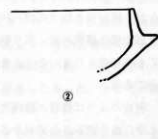
時間的には、I 期末乃至 II 期初頭頃に相当するものであろう。



図版1) 出土遺物(須恵器片)



①



②



第 16 図 須恵器片実測図及び拓影

第4章 封土墳7号と地下式横穴4号、同5号との重なり合いについて

図のように、本遺構と昭和44年発見された地下式横穴4号は、円墳と重なり合って構築されていた。以下、この重なり合いについて他の事例も紹介しながら墳丘と地下式横穴の関係について若干述べてみたい。なお、この両者については本例が発見される前、宮崎県総合博物館紀要2輯にわたくし論述しているので参照されたい。

両者が重なり合って発見された例は相当古くから知られており、「日向国史」の中で、喜田貞吉氏は、「本庄村古陵墓見聞図説」の中からこうした事例を上げられ、地下式横穴が高塚の底部に寄生したものと述べられている。この寄生説に従えば高塚が築造された後に地下式横穴が設けられたことになる。しかし、これはあくまで発見記をもとにしての考察であり、参考にしかり得ない。事実、その前後関係は、その後、逆であることが立証された。それは、昭和17年の六野原古墳群で発見された封土墳10号と地下式横穴10号との重なり合いで、封土墳の下に構築されていた地下式横穴の壁壘の上部が墳丘構築の際、削り取られていた事実である。これは、地下式横穴がその時間差は不明であっても先に造られていたことを示している。もちろん、墳丘に対して構築された地下式横穴が1基の場合である。

現在のように農耕が機械化される以前まで、地下式横穴は、耕作中、牛馬が玄室や羨道部の落下した所に肢を踏みこみ発見することが多かった。こうしたことから一般に地下式は、地上に何等の目印ももたない特殊な埋葬施設とみられてきた。従って、六野原古墳群の例や西部原地下式4号とその上の封土墳3号との重なりについてもこれは全く偶然で、地下式横穴が先に構築され、かなりの時間が経過し、世代の交代もあり当時の人々が地下式横穴の埋葬について忘れられてしまった頃、同所の上には、高塚がたまたま築造されたものであろうという考え方が大勢をしめ、編年のよりどころにさえ利用されるむきがあった。

ところで、果たして地下式横穴には、最初から目印にもなる墳丘がなかったのだろうか。古く、坪井正五郎氏は、「日向」には、此他、地下に土窟を作り、其上に土鐘頭を築き上げたものあり、故に此土鐘頭を去りて、耕地となし其上を馬歩行すると、土階で馬踏込むことあり。」と述べられている。明治30年代のことで氏がどんな資料をもとにしてのこのようなことを発表されたかは全く不明ではあるが重要な見解が語られているといえよう。氏の見解どおりとすれば現存の高塚の中にもこのような例が幾つも内包されており、たまたま、本例のように発見されるということになろう。そこで、今までの発見例からその両者の重なり合いについて一定の方向性があるかどうか、また、盛土内に遺構が存在したかどうかをみてみたい。もし、重なり合いに一定の方向性があり、墳丘内に遺構が存在しないとするれば両者は一体であり、盛土は地下式横穴の墳丘といえよう。

下北方古墳第7号墳は、周囲がかなり耕作のため削り取られているがそれでも長径22メートル、短径17メートル、高さ4.5メートルの円墳で下北方古墳群内では大きな円墳である。この高塚に対して、地下式横穴5号は西南から北東に向かって構築されており、その主軸線は墳丘の中心部に向いている。現状では玄室が2メートル程しか盛土していないが墳壙を推定復元すると玄室のほとんどが墳丘の下に入りこみ、羨道部と壁壘とが墳丘外に位置するようになる。また、同4号は、東側から西側に向

て構築され、その主軸線はやはり同7号墳の中心に向いている。重なり合いは、推定復元の墳壙からみると玄室はもろろのこと羨道部も墳丘の下になり壁壘だけが墳丘外に出るようになる。

他の県下の例をみると、先に紹介した六野原古墳群10号と同地下式横穴10号、西部原古墳群Ⅲ号と同地下式横穴4号、それに西部原古墳群無号墳と同地下式横穴9号、野尻町大萩古墳と同大萩地下式横穴2号等をはじめ、今までに判明している全ての例が本例のように、地下式横穴の主軸線が墳丘の中心部に向っており、しかも、いずれも壁壘は墳丘の外側になるように構築されている。このような事実から両者の重なり合いは全く偶然の重なりではなく、むしろ当初から考慮されて築造されていたのではないかと思われる。

次に、墳丘内部に遺構が存在したかどうかということであるが、これについては調査例が少ない。しかし、今までどこ内部から遺構が発見されたということも聞いていない。六野原10号墳の場合は、墳頂下約40センチの浅い位置から鏡が一面、それに刀、剣、釘の残欠が発見されているが遺構は確認されていない。これについて報告者は、地元の人の話から地主が付近で出土した遺物を墳頂に埋めたものと推論している。また、昭和47年7月九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査の折、えびの市小本原で円墳を調査した。人為的な盛土のあとには確しめられたが遺構は存在しなかった。ところが南側墳壙部から竅穴が見つかり地下式横穴を発見することができた。

この小本原には、かつて小円墳が阿基が存在していたが耕作のためつぎとぎと破壊され、今は一基も残っていない。この破壊の状況を終始見つめてこられた地元の人の話によると、墳丘内からは何等遺構や遺物は発見されなかったが、その下から地下式横穴が確認されたと言っている。

以上、両者の重なり合いの様子からさらにその墳丘内の遺構の有無についてみてきたが、やはり、この重なり合いが偶然のものでなく、両者は一体で地下式横穴が構築されると同時にその墳丘として盛土された疑いがますます濃厚である。かつて大正年間、西部原古墳群発掘調査のとき、いくら発掘しても墳丘内に遺構が発見されなかった小円墳が報告されているが、そのなぞは、発掘された円墳の盛土が地下式横穴の墳丘と考えれば解けそうである。

しかし、まだ、重なり合った高塚内部の調査例が少ないので墳丘説を決定づけるには至らないが、この重なり合いは偶然のものでなく、現在、墳丘をもたない地下式横穴も当初は墳丘をもっていた可能性が十分あり得るということにどめ今後の課題としたい。

注

- ① 石川恒太郎「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」(宮崎県文化財調査報告書第16集)(昭. 47. 3宮崎県教育委員会)所収
- ② 田中 茂「えびの市小本原地下式横穴3号出土品について—地下式横穴と墳丘—」(宮崎県総合博物館研究紀要第2輯)(昭. 49. 3宮崎県総合博物館)所収
- ③ 喜田貞吉「日向国史上巻」(昭. 4. 12. 20) 406~408ページ
- ④ 宮永真琴 和根筆写本が宮崎県総合博物館に所蔵されている。
- ⑤ 「史蹟名勝天然記念物調査報告第十三輯六野原調査報告」(昭. 19. 4宮崎県)
- ⑥ 坪井正五郎「日向の古物遺跡」(史学雑誌第10編第六号)(明. 32. 6)所収

⑦ ②の67ページ

⑧ ⑤の25ページ

⑨ 日高正晴「小木原古墳」11～28ページ〈九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告1〉（昭. 48. 3宮崎県教育委員会）所収

⑩ ②の65ページ

第5章 結語

玄室の奥行きが5メートルを越す地下式横穴は、六野原地下式横穴8号、10号と西都原地下式横穴4号が知られている。構造は、いずれも妻入りで横道に対して奥へ広がる長方形の床面を有し、中央には、一体分の屍床が主軸に沿って設けられている。副葬品は、短甲、肩庇付冑、鏡、丁字頭勾玉等が一般的で、年代は、屍床の状況や遺物からみて5世紀代に編年されており、地下式横穴最古のグループである。中でも、三角板革織式短甲が出土している六野原地下式横穴8号はその成立を5世紀前半期まで上げている方もいる^①。

本地下式横穴も、玄室の奥行きが5メートル以上もあり、内部構造や副葬品からみて古式タイプに属するものである。年代の決め手として馬具、肩庇付冑、金製垂飾付耳飾がある。

馬具とみられる三環鈴は、円環を4分した3か所に小鈴が着いており、しかも鈴の着き方が銅環に短脚でもって接続する形式で七瀬古墳出土のものに似ており、木心鉄張輪鏝と共に古い形式のものである。馬鐔は、鈕が半円形で鐔身の両面には珠文が鑄出されており、側面は、鈕から鐔身にかけ肩部となる段差がないので連続きになっており、まだ類例を知らない形式である。やはり古式に属するものであろう。しかし、こうした古い馬具に対して彎鏡板に装着して発見された一村の杏葉はハート形で時期さがる新形式の杏葉である。従って、この新旧の馬具がセットとして共伴していたことは、三環鈴や輪鏝が次の時期まで使用されていたことを示しており小野山節氏のいう第二期に編年されるものである^②。

次に、肩庇付冑であるが、その年代観については古墳時代中期に限られた期間の遺物であることが提唱されている^③。しかも、その下限は朝鮮移入の金銅製冠帽や金製耳飾などが普及した中期末から後期初頭といわれている^④。本遺構は、金製耳飾も出土しており、肩庇付冑から金製耳飾等に交替する時期にあたり、馬具の編年と合致する5世紀末から6世紀初頭の地下式横穴といえる。

豊富な副葬品の中で、まだ、他所から発見例を聞かない変わったガラス玉が含まれている。大きな丸玉を半載したような形で、仮に寛形半円ガラス玉とか半球玉とか呼んでいる。このガラス玉は、昭和44年に調査された地下式横穴4号の玄室内からも1個発見されている^⑤。当時は、それが残欠であったため、こわれた勾玉と見間違えられていた。このガラス玉が4号からも出土していることは、両者が深い関係にあり、時的にもそう遠くない時期に2基とも構築されていることを示している。従って、先述のように7号墳との重なり合いからみると、まず、本5号が構築され、同時に墳丘も盛られ、や

がて、半球玉を分与されていた近親の4号被葬者を5号の地点から、145度回転した墳裾の一角にやはり主軸を盛土の中心に向けて寄生したように構築された遺構に埋葬したと思われる。同一墳丘に複数の横穴式石室が設けられている例と全く似ている。

これまで、地下式横穴の出土品を一部の報告例から見て貧弱だという研究家もいたが、決してそうではない。その一例が本地下式横穴である。副葬品の内容や組合わせは畿内の5世紀後半の高塚古墳から発見されているものとよく似ておりその強い影響がうかがわれる。

註

① 乙益重孝「古代南辺文化の考古学的考察」（日本文化研究所紀要第27輯）

（昭. 46. 3国学院大学）所収

② 樋口隆康、岡崎敬、宮川健「和泉国七瀬古墳調査報告」（古代学研究27）（1961. 4）所収

③ 小野山節「馬具と乗馬の風習」（世界考古学大系）（昭. 34. 11）所収

④ 小林行雄「古墳時代の研究」（1961. 1）248ページ

⑤ 小林行雄「古墳時代の研究」（前掲）250ページ

⑥ 石川恒太郎「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」（宮崎県文化財調査報告書第16集）

（昭. 47. 3宮崎県教育委員会）所収

版 圖



図版(2) 下北方古墳群遠景(下北方古墳群第2号墳頂から)



図版(3) 下北方古墳群、第7号墳近景



图版(4) 地下式横穴第5号陷没位置



图版(5) 地下式横穴第5号陷没穴



図版(6) 整墳及び羨道部



図版(7) 羨道閉塞状態



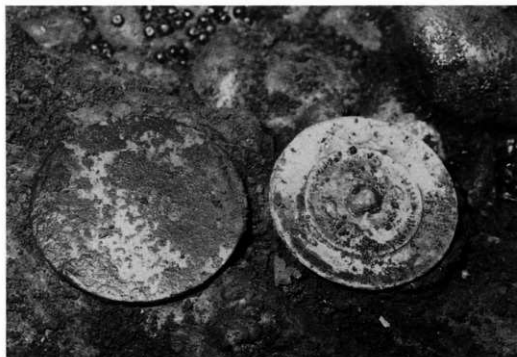
図版(8) 玄室内部構造



図版(9) 内部構造 (衝立状石積み状態)



図版10 麗床内副葬品出土状態



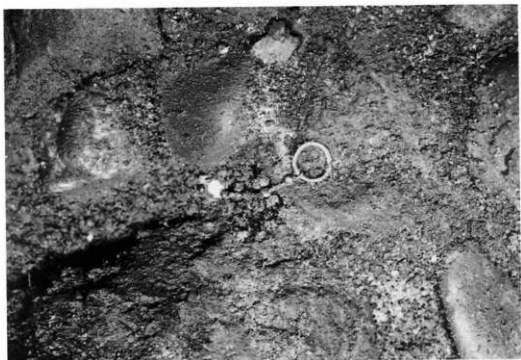
図版11 鏡出土状態



图版12 短甲出土状态



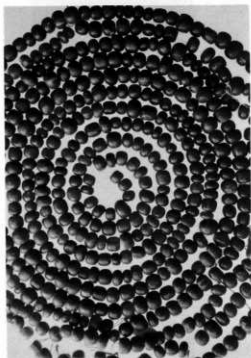
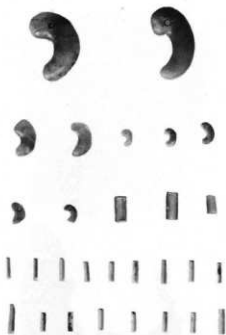
图版13 勾玉、丸玉出土状态



図版14 金製垂飾付耳飾出土状態

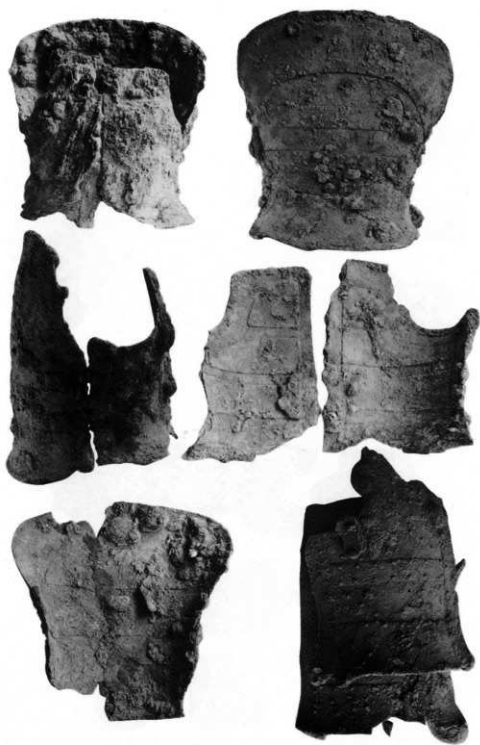


図版15 銅甕付青出土状態



圖版16 出土遺物 裝身具

(勾玉、管玉、金製垂飾付耳飾、丸玉(大・小)、変形半円玉)



图版07 出土遺物 武具 I
〔横短板鍔留短甲、三角板鍔留短甲〕



图版10 出土遺物 武具Ⅱ
〔頭甲、小札〕



図版19 出土遺物、武具Ⅲ
〔履底付膏〕



图版20 出土遺物 馬具I
〔鞍金具、轡鐵板、轡、杏葉〕



图版20 出土遗物

鏡〔窠形紋鏡、窠形獸形鏡〕馬具Ⅱ〔三環鈴、馬鐸〕



図版22 出土遺物

武器〔剣、直刀、鉞、石突、鉄鏃〕 農工具〔手斧、鉄斧（大・小）、のみ状鉄器、カギ状鉄器、鏝〕

下北方地下式横穴第5号発掘調査報告書

昭和52年3月31日 発行

編集・発行 宮崎市教育委員会
印刷 小柳印刷株式会社
宮崎市旭1丁目6-25

